

## 【中学校の部】

### 最優秀賞

「同じ人間として」

登米市立東和中学校 三年 伊藤 いとう 利理子 りりこ

今年七月に起きた神奈川県障害者施設襲撃事件。たくさんの 尊い命が一瞬のうちに奪われました。私は、このニュースを見て、恐怖心と共に、とても複雑な気持ちになりました。容疑者の供述内容に、言葉を失うほどショックを受けたのです。障害者の存在を否定する数々の冷酷な言葉は、信じられない出来事として私の心に刻まれ、怒りが込み上げました。

私には、八歳年上の姉がいます。姉は小さい頃から知的障害を持っていますが、いつも一生懸命頑張って生きています。言葉が流暢に話せず、今でも「かわいい」「ふわふわ」等、簡単な単語を心のままに表現しています。姉は、支援学校を卒業してから、東和町にある「若葉園」という所で、おいしいパンを作って働いています。社会人として、休まずに毎日立派に働いている姉をすばらしいと尊敬しています。姉の自立が私の模範です。

しかし、そんな姉のことを言うと、「大変だね」と、声を掛けられることがありました。「別に普通なのになぜ？」と、違和感を持つようになり、立ち止まって考えました。

確かに、姉は他の人と違うところがあると思います。多くの人が当たり前にできることができないこともあります。でも、他の人とは違う優れたところだっといういはあるのです。例えば、切り絵を忠実に制作し、黒い龍を完成させ、きれいな色を付け足して仕上げました。私は、とても感心しました。また、西暦と日付から瞬時に曜日を言い当てることができ、驚きました。朝顔の花を育てて水かけをしながら咲かせては喜んでいる姉の笑顔に、私はほっとする優しさを感じます。家族の仕事も手伝っている姉は、いつも前向きなのです。

でも、「障害者はおかしい」とか、「障害者は怖い」等と、言っている場面に直面したこともありました。みんなは、そんな風にも思っているのかと、胸が痛くなりました。そして、実際に私も、友達に家へ遊びに来てもらうのは遠慮してもらった時期がありました。ある日、自閉症の息子を持つ親の記事、神戸金史さんという方の思いを、インターネットで調べものをしていた時に読んでみました。私は、身体の奥底から何かが込み上げてくるような衝撃を感じました。次の一節です。

「私は、思うのです。長男がもし障害を持っていなければ…。あなた（長男）は、もっと普通の生活を送っていたかも知れないと。」この部分を、私は姉と重ねて読みました。姉にこのような障害がなかったら、もっと楽しいことがたくさんあり、自由に自分の夢を

叶える努力をし、実現したのではないのかと。

しかし、私はさらに別の部分も読み、何も姉は特別ではないということを感じさせられました。姉にもっといろいろなことを相談してみたけれど、それは無理で、姉の人生を歩む選択肢は私に比べてずっと少ないと可哀想に思ってしまった自分を反省しました。姉は、少しも悔やんでいないし、あるがままを受け入れて精一杯、誠実に幸せを感じて生きています。私は「ごめんなさい」と、謝りました。

「ああ、息子よ。誰もが健常で生きることができない。誰もが障害を持って生きなければならぬ。交通事故に遭って車椅子で暮らす小学生が、寝たきりになった中学生が、おかしなワクチン注射を受け、普通に暮らせなくなった高校生が、実は私の周りにいたはずだ。私は、運よく生きてきただけだった。」

この神戸さんの言葉も心に響き、忘れられません。たとえ、今は健康を自慢できる人でも、何かの事情や病気・事故・災害等で困難な状況を強いられ、障害者という立場になる場合があるのです。冷静に考えれば、年齢を積み重ねていけば、身体も弱まり、手足の動きが鈍くなったり視力が衰えたりするようになっていくのです。健常者と障害者という言葉の区別は無いと言ってもよいほど、本当は皆同じ人間なのではないでしょうか。だからこそ、差別や無視、助けが必要な人を批難したり迷惑がったり、否定的な捉えをしてはいけないと思います。自分自身や自分にとって大切な人々が、事故や病気等で動けなくなった時、私たちは人に助けを自然に求め、また相手の意思を尊重し、確認したうえでできる支援をしていくべきだと考えます。差別や偏見を無くし、誰もが安心して生きていける社会を、私は時間がかかっても築いていきたい。

リオのパラリンピックで奮闘する選手や共に協力する人々の姿に感動しました。かつて車椅子で腕の無い人が口にラケットをくわえプレーする卓球を見、集中力・判断力・技術や精神力に圧倒されました。可能性の広がり。

私たちは、人を傷つけるために生きているわけではありません。生きる喜びを得て、幸せになるために生まれてきました。私は、人の痛みを感じ、同じ人間同士として心から楽しいと思える交流を大切にしていきます。